

# 日本語読解学習支援サイト“tutor.bunko”の構想と開発

## —総合的な技能養成を目指した方向性とそのコンテンツ—

森川 結花<sup>1</sup>・永須 実香<sup>2</sup>・春名 宣明<sup>3</sup>・北村 達也<sup>4</sup>

### 要旨

tutor.bunko(URL:<http://basil.is.konan-u.ac.jp/tutor/bunko/>、2009年9月より公開)は、自律的な読解学習を支援するために作成された学習支援サイトである。特に中級レベル以上の日本語学習に困難を抱える非漢字文化圏学習者を支援するために、本文テキスト中にさまざまな工夫がなされている。学習者はtutor.bunkoに公開されている読解教材を読み、音声を聞き、内容質問(考える問題)をキューとして読みを深め、自分の意見を日本語で書く。そして、インターネットのメール機能、ブログ機能を利用して、学習支援者や他の学習者と日本語で交流する。この学習プロセスは単なる「日本語の読解練習」ではなく、知的に高いレベルの語学力の習得を目指した「内容中心の語学教育」を志向するものである。学習者はこの学習活動を通じて、日本語と日本文化についての学びを深め、自身の総合的な日本語能力(プロフィシエンシー)を育むことができる。

また、tutor.bunkoは、教師のための教材作成支援システムとも連携しており、教師が教材を作成したり共有したりするためのサイトでもある。教師、学習者ともにtutor.bunkoを活用することで学習や教材作成に伴う負担を軽減することができ、また、インターネット上での日本語の議論や交流もすることができる。

**キーワード**：読解練習、内容中心の語学教育、プロフィシエンシー、インターネット、学習支援サイト

## 1. はじめに

現在、世界で日本語を学ぶ学習者の総数は約300万人、日本語能力試験の受験者総数は日本国内外を合わせて約56万人にのぼり、日本語はすっかり世界の言語の中でもメジャーな「外国語」の一つとなった<sup>5</sup>。この趨勢を反映して日本語学習用の教科書や教材が次々に開発されているが、中級

---

1 甲南大学国際言語文化センター

2 上智大学国際教養学部

3 甲南大学理工学部

4 甲南大学知能情報学部

5 国際交流基金(2006)の調査による。

レベル以上に進んだ非漢字文化圏学習者にとって適当と言えるものはまだ少ない<sup>6</sup>。

この状況の中で、森川・永須は中級レベル以上の非漢字文化圏学習者にとって理想的な教科書・教材のあり方を模索し開発への試行錯誤を重ねてきた<sup>7</sup>が、それを北村・春名との共同研究プロジェクトの中で中級・上級学習者向け読解学習支援サイト“tutor.bunko”として具体化していくことになった。プロジェクトの初年度である2009年度は、tutor.bunkoのうちの上級レベル学習者向けのコンテンツ『日本語上級者のための 日本文学 珠玉の小品集』<sup>8</sup>（以下、「小品集」と呼ぶ。URL:<http://basil.is.konan-u.ac.jp/tutor/bunko/>）の作成に取り組み、公開を開始した。

本稿では、tutor.bunkoの開発までの経緯と理念、サイト内の構成、コンテンツの具体的な内容などについて日本語教育からの立場から詳述していくことにする。

## 2. 既存の教科書の問題点と tutor.bunko の理念

非漢字文化圏学習者にとって日本語学習の道りは遠く険しい。たとえば、英語話者がある外国語を学習して上級レベル<sup>9</sup>に達するまでに要する時間を比べてみると、最も易しいとされるスペイン語フランス語などに比べて、日本語は倍以上の学習時間を要する「最難度言語」とされている<sup>10</sup>。

しかし、初級、中級、上級レベルと全てのステップにわたって常に日本語学習が学習者にとって「最難」に感じられるというわけではない。日本語学習でも初級の段階は「習って嬉しく、使って楽しい」実感が得られる要素が多い<sup>11</sup>。ところが、学習段階が中級以降のレベルにすすみ、知的レ

---

<sup>6</sup> 適当な教科書の本数が少ないが故にある特定の教科書をどこの教育機関でも採用することになり、その結果、甲南大学の日本語プログラムでは例年「教科書リピーター問題」（母校で使用した教科書と同じ教科書を留学先でも勉強させられる）という弊害が発生する。同じ教科書を再履修するのを学習者がいやがってその人にとって適当なレベルに在籍したとらないなど、現場では深刻な問題の原因となっていることが少なくない。

<sup>7</sup> 森川・永須は、それぞれの勤務校において交換留学生を対象とした日本語コースで教育指導にあたっている。両校とも欧米系の留学生が多いという特色があり、漢字をはじめとする非漢字文化圏学習者が直面しがちな学習上の問題が、必然的に筆者らにとっても教育・研究上の課題となることが多い。したがって、本稿でいう「学習者」とは特にことわりのない限り非漢字文化圏学習者を指す。

<sup>8</sup> 2009年9月24日より公開。公開当初のURLは今後、tutor.bunko内のコンテンツの拡充・整備に伴って変更する予定である。

<sup>9</sup> Common European Framework of Reference for Language（言語のための欧州共通参照枠組み、略称CEFR）基準によると、上級レベルとは高度な知的教養を持った成人のこなす思考や伝達行動に必要な言語を使用できるレベルであり、目標言語の言語そのもののみならず、文化的な要素をも含めたプロフィシエンシーが必要とされる。筆者らもtutor.bunkoのコンテンツ開発にあたって、このCEFR基準を常に念頭に置き、その方向を志向している。

<sup>10</sup> 高梨（2009）のデータによると、アメリカ人学習者（外交官候補）が週30時間の集中コースで上級レベルに到達するまでに日本語は44週（1320時間）を要するとして、最難度言語のカテゴリーに分類されている。

<sup>11</sup> 初級の段階での学習事項は日本語の日常使用の場と即結びついているため、学習者が学習事項の

ベルの高いアカデミックな要素が強まるに従って日本語学習は学習者に負担と苦痛を強いる方向に傾く。既存の中級・上級教科書でも文化的な、あるいはコンテンポラリーな話題を扱った生教材を本文に採用するなどして、学習者の興味・関心を刺激する工夫はなされているのだが、学習者は日本語（の文章）そのものの壁が越えられない。膨大な漢字、語彙が用いられ、「書き言葉的」文体で綴られた文脈から内容を正確に読み取ること、そしてその教材本文の中から学習項目を学んでいくことは学習者にはなかなかの苦行である<sup>12</sup>。

この、既存の教科書・教材が「本文」として採用している日本語の文章の問題点については、これまで日本語教育の分野であまり議論をされてこなかったが、森川・永須（以後、「筆者ら」と略す）はそれぞれの教育実践の場で日々強く実感している（【表1】左側）。が、そこから逆の発想で「教材本文がこのようであれば」という理想像も得られる。（【表1】右側）。

【表1】中級・上級レベルの教科書の問題点と理想像

既存教科書の本文に見られる問題点	教材本文の理想像
本文のテーマ（話題）が堅く、重く、暗い	意義深いテーマがあり、そのテーマを伝えるストーリーを楽しむことも出来る
本文のテーマの話題性が短命である	時間を超えて文化的な価値が安定している
本文のテーマが実際の日本人との会話の中で話題になりにくい	日本人との共通の話題になりやすい
学習者が、現実の「生の日本語」からかけ離れた書き言葉を学習させられていると誤解しがちである	学習者が「本当の日本語に触れている」という実感＝本物感 <sup>13</sup> を得やすい
文そのものが良質な日本語の文であるとは言えない	日本語としての質の高い文（名文）であることが保証されている
文の構造がわかりにくく、文章全体の結論が伝わりにくい	ストーリーがわかりやすく、学習者がフォローして行きやすい
書き言葉に偏った文体	生き生きとした会話文を含む
漢字語彙あるいは（学習者にとっての）未習語彙が多い	漢字や語彙の負担を軽減する支援が工夫されている

プラクティカルな意義を理解しやすいからであると考えられる。

<sup>12</sup> 実際、甲南プログラムにおいて学年度末にとられる学習者からの授業評価アンケートを見ると、中級レベル以上の学習者からは「日常生活で全く使わない単語や漢字を覚えさせられた」「学習活動が読み書きに偏りすぎて、生産的ではない」「暗記中心すぎるし、暗記したこともテストが済めばすぐ忘れるので意味がない」など、批判的な評価が出やすい。

<sup>13</sup> 本物感 authenticity

以上のような理想の日本語学習教材の実現を目指して、筆者らは tutor. bunko を構想し、教材コンテンツの開発を進めている。

### 3. tutor. bunko の全体像

tutor. bunko プロジェクトは、既存の日本語学習支援サイトである「日本語読解学習支援システム リーディング・チュウ太 Reading Tutor」(URL:<http://language.tiu.ac.jp/>) の派生プロジェクトとしてスタートした。tutor. bunko の名称は、自律学習のための支援機能 (=tutor) を備えた読解教材等のストレージ (すなわち日本語の「文庫」=bunko) のイメージを表したものである。

次ページの【図1】に、その全体的な構成を示す。

tutor. bunko の大きな特長は、インターネットを通じて学習者に教材を提供し学習活動を支援していくシステムであると同時に、メールによる添削システムとブログ・サイトによって、学習者と教師 (=学習支援者)・教師と教師の相互伝達・交流活動の場としても機能しうることである。【図1】で双方向矢印 (桃色) で示した部分が、相互伝達・交流活動の機能を示している。つまり、tutor. bunko での学習活動は、ただ学習者が受動的に教材と学習ガイダンスに従って学習を進めるだけで完結するのではなく、学習者の方からのアウトプット (発信) と、それに対する tutor. bunko (=学習支援者) からのフィードバックという双方向の言葉のやりとりの形をとる。読解練習というと受け身的なインプットのみでの学習に終わりがちだが、tutor. bunko は読解練習を通じて学習者に内容の濃い日本語の伝達活動を体験してもらうことで、彼らの日本語の運用能力 (プロフィシエンシー) を引き上げようとしているわけである。

具体的な tutor. bunko のコンテンツは大きく三つの部門に別れる。上級学習者向けの【上級編】、中級学習者向けの【中級編】、そして、【副教材集】である。このうち、まずは【上級編】である「小品集」から教材コンテンツを開発し、2009年9月よりインターネット上で公開している。2010年には「小品集」の姉妹編である【中級編】も公開される予定である。

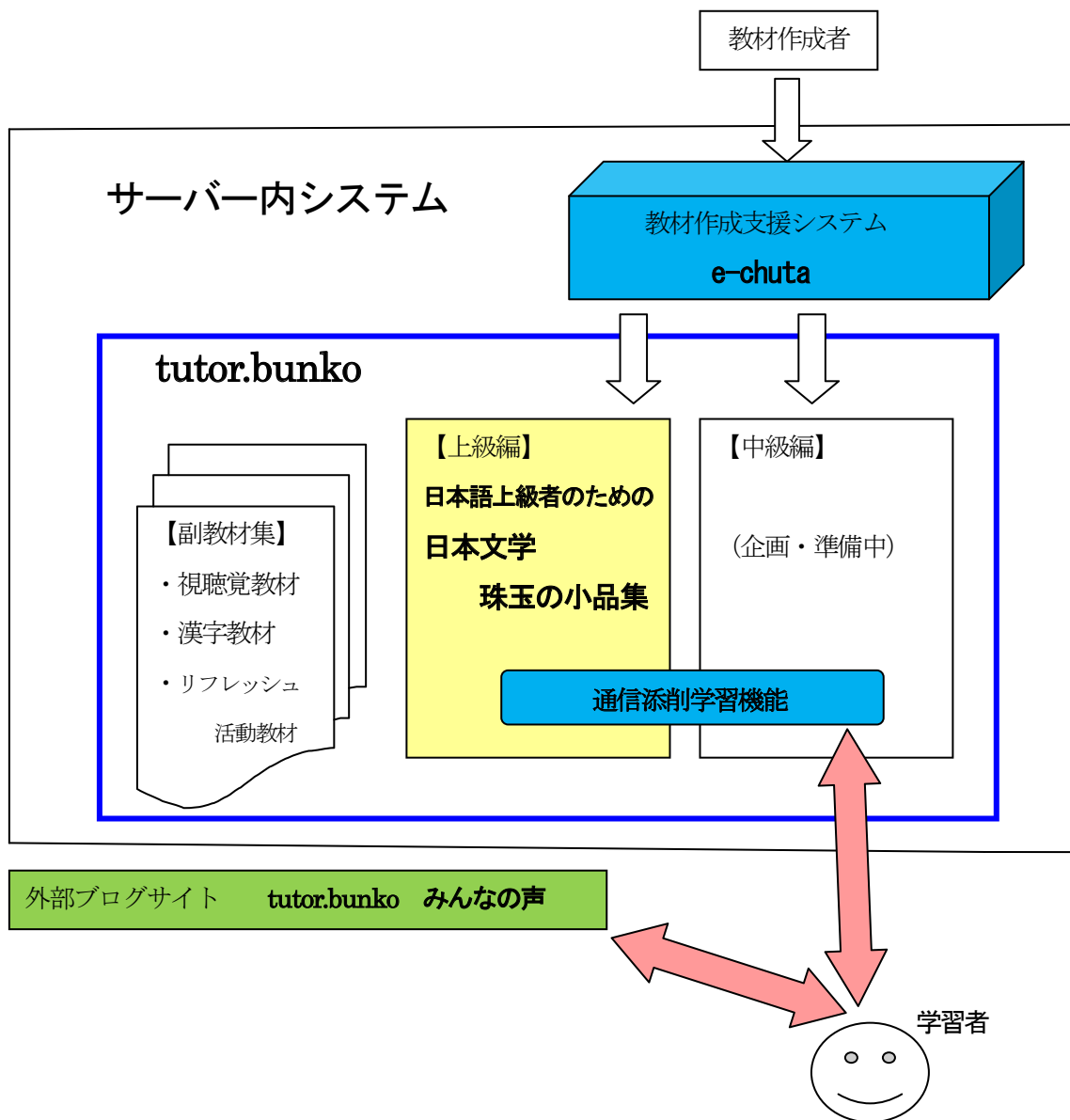
【副教材集】は、筆者ら教材作成者が実際に教室での日本語指導を実践するにあたって開発した諸々の副教材で、日本語教師間での教材の共有を目的にインターネット上に公開するものである。

また、tutor. bunko のもう一つの大きな特長として、同一サーバー内にある教材作成支援システム e-chuta (イーチュータ) と連携しているという点がある (e-chuta については5章で詳述する)。e-chuta で作成された教材が【上級編】【中級編】の教材コンテンツとなって、さらにコンテンツが拡充していくというわけである。

以上をまとめると、tutor. bunko は、学習者のみならず教師をも支援の対象とした日本語学習サイトであるということができる。そして、両者の橋渡しの機能を果たすことをねらって外部ブログサイト「tutor. bunko みんなの声」(URL:<http://blog.goo.ne.jp/kasu3kou1>) とリンクさせている。

学習者も教師も活用し、支援を得、日本語での交流活動ができるサイト、それが tutor.bunko の全体像である。

【図1】 tutor.bunko の全体像



#### 4. 「日本語上級者のための 日本文学 珠玉の小品集」

tutor.bunko は上級レベル学習者向けの読解教材集である「日本語上級者のための 日本文学 珠玉の小品集」から教材コンテンツの開発を進め、インターネット上での公開を始めた。この章では「小品集」の各部立てについて詳しく見ていくことにする。

【図2】日本文学珠玉の小品集トップページ



##### 4. 1 読解教材テキストとしての文学作品の選定基準

「小品集」のコンテンツとして、青空文庫所収の作品から採択した<sup>14</sup>の六つの名作短編作品をテキストとして開発された読解教材が公開されている。それらの作品のデータを以下に示す。

【表2】「小品集」の作品データ

作品名	作者	発表年	およその文字数 <sup>15</sup>	青空文庫データ	
				No.	テキストファイル KB
ごん狐	新美南吉	1932年	約4,560字	628	5,438
南京の基督	芥川龍之介	1920年	約10,020字	105	11,649

<sup>14</sup> 著作権問題の発生を避けるべく、当面は著作権フリーのテキストである青空文庫所収の作品を用いることにしている。

<sup>15</sup> 作品の文字数は、青空文庫からダウンロードしたテキストをふりがなを除くなどの処理をした上でwordに貼り付け、文字カウント機能で表示された数を目安にした。

一房の葡萄	有島武郎	1920年	約6,460字	211	7,363
桜桃	太宰治	1948年	約4,890字	308	6,033
セロ弾きのゴーシュ	宮沢賢治	1934年	約11,670字	470	11,159
夏目漱石先生の追憶	寺田寅彦	1932年	約5,490字	2472	10,956

「小品集」教材本文の採択に際して、次の5点を基準として選定した。

【表3】「小品集」の作品採択基準

作者の知名度	知名度が高く、すでに学習者にとっても馴染みがある
テキストの長さ	学習者にとって読み切れる程度であること(文字数にして上限10000字程度)
日本語の位相	標準語のテキストであること
内容	あまりにも陰惨なものではないこと。
	読者に訴えるテーマがはっきりしていること
	ストーリーのプロットがわかりやすいものであること。

筆者らが文学作品を読解教材のテキストとして採用するのは、文学作品の文章が、前述(2章【表1】)した教材本文の理想的要素(意義深いテーマがあること、ストーリーが楽しめること、本物感があること、日本語としての質が高いこと、日本人と話題を共有しやすいこと、など)を備えていることに加えて、作品のテーマや文化的背景などを学習活動の中で取り上げることに教育的価値と認められるということが大きい。作品が生・死・愛など、国や民族、文化の境界を超えた人間存在そのものの問題をテーマにするものであれば、それについて深く考え語り合う価値も普遍的に認められよう。それと同時に、作品の文化的背景を知る(あるいは発見する)喜びもあり、比較文化論の観点からの考察や議論の対象にもなりやすい。このような観点から、文学作品が上級学習者(ないしは上級レベルを目指す学習者)にとって、さまざまな学習活動をするための「題材」として適当であると考えられるのである。

そのほかにも、文学作品を教材とすることには以下のメリットがあるという知見が森川(2009)で報告されている。

【表4】文学作品を教材のテキストにすることで生じる付随的なメリット

学習過程における メリット	学習者が「本物の日本語に触れている」という喜びを感じられる
	翻訳や映像化作品(映画、テレビドラマ)を補助的な手段として用いることが出来る。

	作文（読後レポートや創作）や読書会など、生産的な学習活動に発展させやすい
学習後に得られる メリット	学習者が一編の作品を読み通したという満足感と自信を得られる

一部には翻訳や映像化作品を読解学習の補助手段として使用することに否定的な見方もあるだろう。しかし、これらを使用することで学習者に文化的な情報を効率よく理解させることができ、原作を読む際の誤読も回避できるので、まだ素手で日本語の文学作品を読むには日本語能力の及ばない学習者にも、日本文学が手の届くものとなりうる。原作の日本語の文章と他言語翻訳版との比較参照を通して、学習者が（翻訳不可能な）日本語特有の表現するという体験をすることもできる。また、作品読了後に作文や読書会などのプロダクティブな活動につなげていけば、その学習活動過程で学習者は何度も教材テキストに立ち返り、日本語の原文を読み返すことになる。

以上のような学習活動を通じて、結果的に学習者は良質の日本語のインプットを複数回にわたって得ることができるのである。

名作とされている文学作品には、このような学習活動に伴う繰り返し読みに耐える「質」が保証されている。言い換えれば、何度読んでもいいものはよく、読み手を飽きさせることもなく、読むたびに新しい発見が得られると言っても過言ではない。「暗唱できるまで読んでいい日本語」として学習者に勧められるテキスト、それが、tutor.bunko が選んだ「珠玉の」文学作品である。

#### 4. 2 「小品集」の教材コンテンツ

一つの作品内のコンテンツは次のように構成されている。

【表5】「小品集」の一作品内コンテンツの構成

1) 作品の紹介（英訳付）	
2) 本文	————— a) 語注表示機能付き HTML ファイル    b) PDF ファイル
3) 朗読音声	
4) 問題練習	————— a) 選ぶ問題    b) 考える問題（英訳付）
5) 索引	————— a) 語彙リスト, b) 文型リスト
6) あとがき（英訳付）	
7) ブログ	

以上の詳細を、「ごん狐」を例に紹介する。



【図3】 こん狐 トップページ



#### 4. 2. 1 作品の紹介

「作品の紹介」では、当該作品の文化的な価値、鑑賞のポイントなどを示し、学習者の興味や読んでみたいと思う気持ちを高めたり、あるいは文化的な差異から外国人学習者が抱きがちな偏見や誤解を避けるためのガイダンスを行う。たとえば、「こん狐」では、この国民的童話のベースに日本人のユニークな物の見方（動物に対する擬人化と感情移入）があることを指摘し、日本文化を知る上で参考になる資料であることを紹介している。

なお、学習者に教材作成者の意図を正しく伝えるための配慮として、全文訳（英訳）を付してある。

#### 4. 2. 2 本文

本文となるテキストは HTML ファイルと PDF ファイルの形で公開している。

HTML ファイルの特長は、多くの学習者が日本語の文章読解に際して苦手とする点を配慮し、学習者の誤読を回避して読みをスムーズにするため、以下のような工夫が施されていることである。

【表6】 本文テキストHTML ファイルの特長

- 
- |  |
|--|
| a. 一文一行表示（文番号付）                          |
| b. ツールチップ語注表示機能（色つきリンクバージョン、色なしリンクバージョン） |
-

---

c. ふりがな（プレ2級レベル<sup>16</sup>に設定）

d. 挿絵

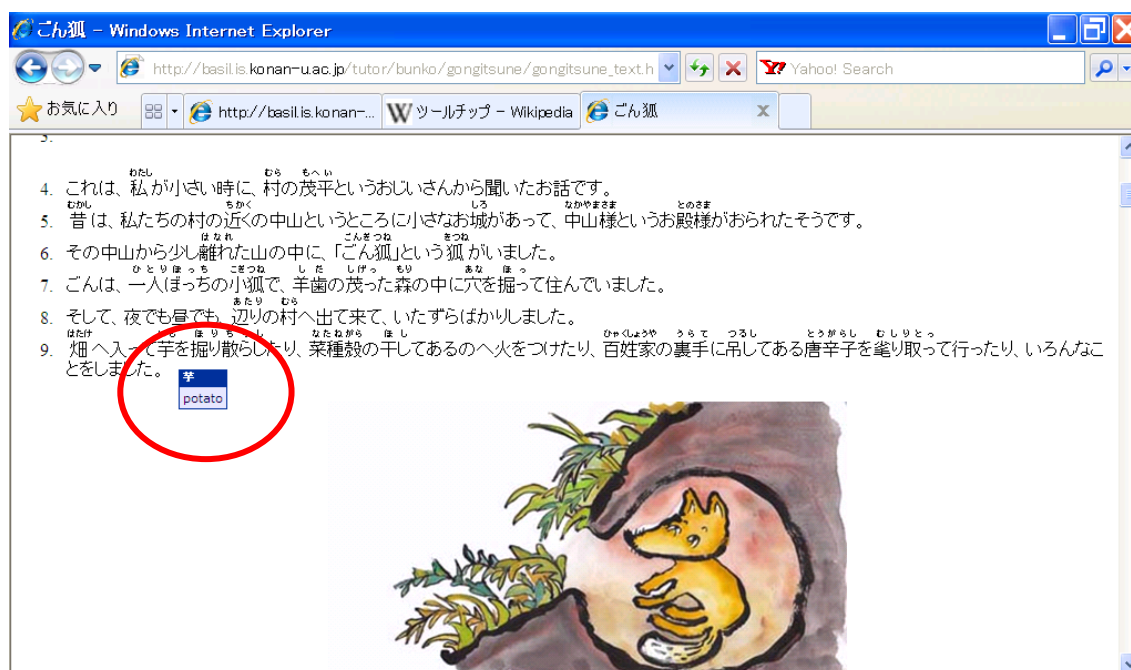
---

このうち、a. 一文一行表示とb. ツールチップ語注表示は、web ページ上でこそ可能になったものである。

まず、一文一行表示であるが、日本語の文章を読むことに経験の乏しい学習者の場合、文章を目の当たりにしても、この一文がどこからどこまで続くのかという最も基本的な認識さえ危ういか、あるいはそのことが意識の上にものぼらないまま、ただ漫然と文字を追うといったことが考えられる。そこで、学習者に「文」を常に意識させるため、「小品集」ではあえて一文一行の形で表示し、一文ごとに文番号を付した。紙媒体では物理的な制約によって実現しえない表示法であるが、web ページの特性を生かして可能となった。

ツールチップによる語注表示機能とは、学習者が分からない語句の上にカーソルを置くと自動的にツールチップで英訳ないし日本語による語注が表示される仕組みのことをいう（【図4】）。

【図4】 ツールチップ語注表示機能



語句の注釈はふりがなと同じくプレ2級レベルを想定して施した。この機能によって、学習者は

---

16 「小品集」の学習に取り組める学習者の日本語能力の下限を日本語能力試験（旧試験）2級合格レベル手前と想定し、2級レベルの漢字および漢字語彙にふりがなを付した。なお、漢字・語彙のレベル判定にはリーディング・チュウ太のレベル判定ツールを使用した。

各自の必要に応じて語注を容易に参照することができる。語句の注釈には文脈上最も適切な訳語ないし注釈を提示するようにし、従来の web 辞書表示機能のように複数の意味記述の中から学習者が最も適切な意味を選ぶという負担を軽減している。また、従来の web 辞書表示機能では不可能であった連語や複合語の注釈表示（【図 5】）も可能となった。

【図 5】 連語の意味表示



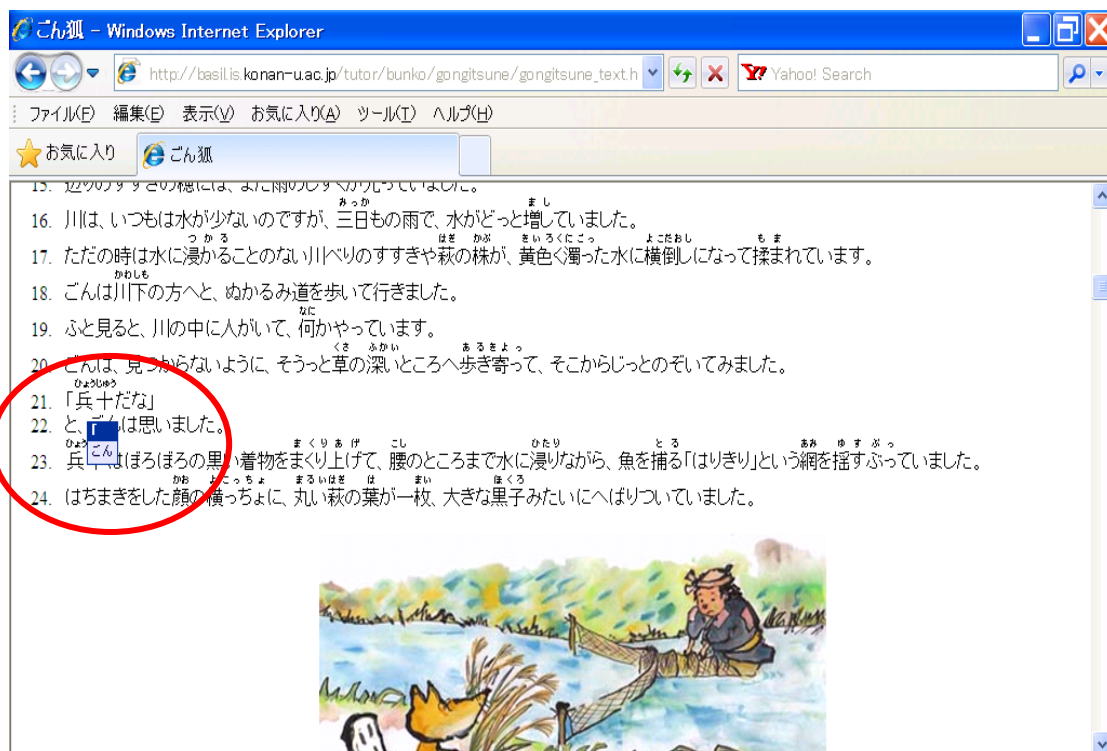
さらに、語句の注釈のみならず、学習者が混乱しがちな会話文の話し手（誰がこの台詞を話しているか<sup>17)</sup>）も表示できるようにした（【図 6】）。会話文の話し手の表示は、学習者が文脈をスムーズに、かつ、正確に理解するために効果的な支援となる。

17 次のような日本語母語話者にとっては自然で何の苦もなく流れが捉えられる文脈が、多くの日本語学習者には却って、誰が何を話してどんな行為をしたのかという基本的な事実関係の捉えにくいものである。

その日も、かあちゃんから二通の手紙が届いて、俺とばあちゃんは茶の間でそれを読んでいた。  
「ごめんください」  
「はい、はい。どなた？」  
玄関で声がしたので、ばあちゃんが表に出ていった。  
(島田洋七著『がばいばあちゃん』(徳間文庫) 115 頁より)

しかし、この文章にしても、(客)「ごめんください」 / (ばあちゃん)「はい、はい、どなた？」のように会話文の話し手を明示することで、学習者が確実に正しい文脈把握をするように導くことができる。

【図6】会話文の話し手表示



このようにして、本文HTMLファイルでは、文、ふりがな、語句の意味、話し手、さらに挿絵による場面のイメージまで、学習者への助けとなる複数の視覚的情報を一画面内に共存させ、学習者がある程度楽に、日本語の文章を読み進めていけるようにしてある。

なお、HTMLファイルにはツールチップ語注表示機能の色つきリンクで示したものとリンクなしのものの2種を公開しており、これも学習者の好みや必要性に応じて選択できるようになっている。

逆に、これらの情報支援を必要としない学習者なり学習状況があることも想定して、PDFファイルの形で本文テキストを3種類公開している。それらには、プレ2級レベル、プレ1級レベル、ネイティブ・レベルと段階をわけてふりがなを振っているので、学習者のレベルやニーズに合わせて、適当な本文テキストを選択できる。

#### 4. 2. 3 朗読音声

作品の朗読音声データはmp3形式で公開されている。学習者は自分のメディアに音声を取り込んで学習を進めることができる。一つの作品につき複数の朗読者による朗読音声が開示されていく予定である。なお、学習者が携帯端末機に音声データをダウンロードして使用することを想定して、iTunes Storeでも公開している。学習者にとって身近で親しみやすいツールが使えるようにすることによって、学習者の心理的負担を軽減する効果が見込まれる。

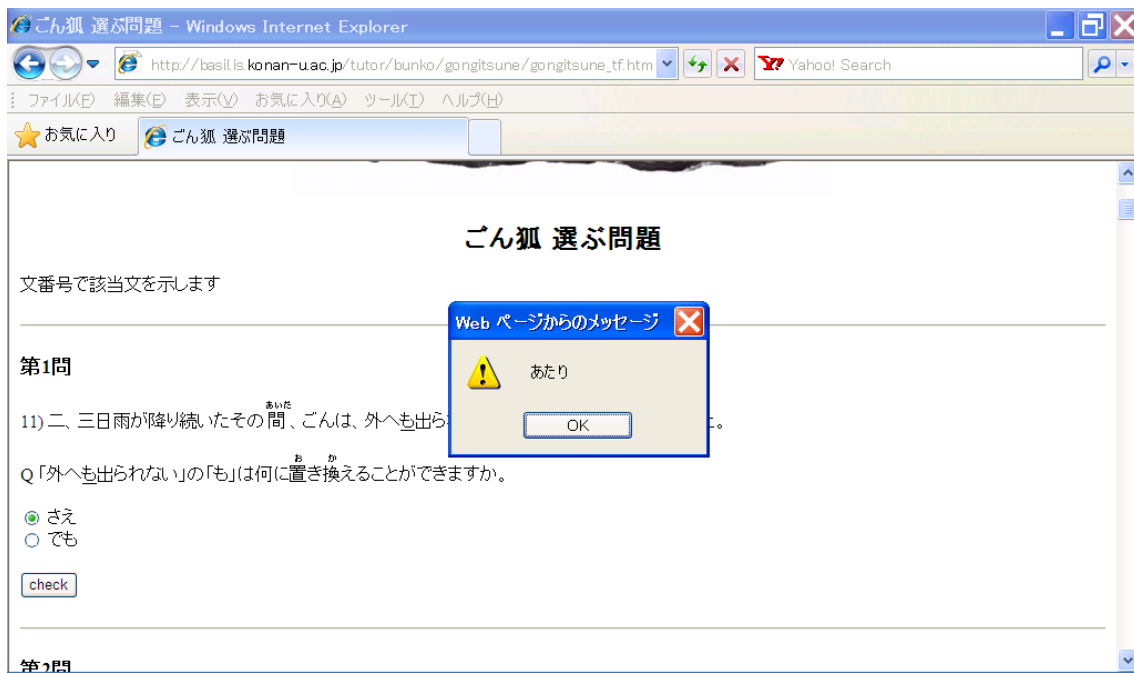
#### 4. 2. 4 問題練習

日本語学習支援サイトとしての tutor. bunko で、筆者ら教材作成者が最も力を入れている部分が問題練習のセクションである。前述した本文の読解そのものに関しては、IT 技術の助けを借りて学習者が楽にスムーズに文章を読んでいけるように、学習者が感じる困難を取り除き、正確な読みへと導く工夫が施されている。その裏には、学習者に「問題」にチャレンジすることに多くの力を注いでもらい、そのことによって作品の読みを深め、総合的な日本語の運用能力を伸ばすことにつながってほしいというねらいがある。

このねらいのもとに作成された問題練習コンテンツには二種類のタイプがある。その一つは「選ぶ問題」(＝正誤選択問題)、もう一つは「考える問題」(＝記述問題)である。

「選ぶ問題」は、主に語句や表現文型の意味・用法、さらに動詞や文全体の主語、指示語の内容、文脈のとらえ方などについて、学習者が適切に理解しているか否かを確認するための問題である。回答は選択肢(基本的に2択)から選び、チェックボタンを押せば即座に正否判定が現れるようになっている。

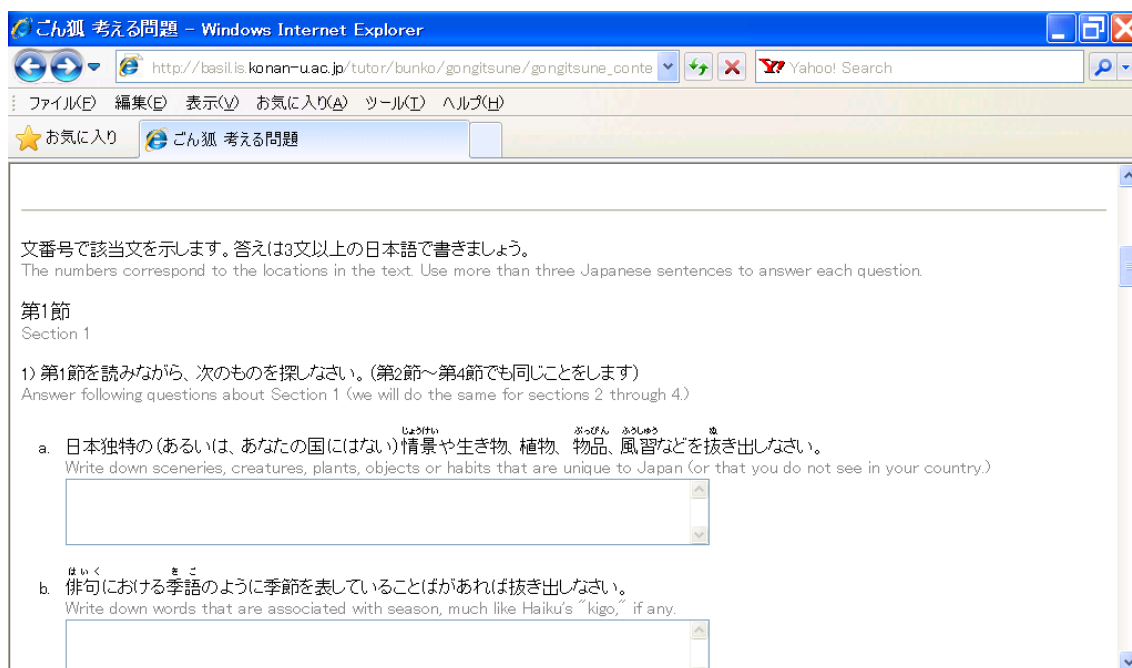
【図7】選ぶ問題(正解を選択した場合の画面)



「選ぶ問題」がいわば文章読解上のテクニカルな要素についての問いであり、唯一の正しい答えがあるタイプであるのに対し、「考える問題」は文章を深く、行間まで読み込み、そこから新たに学習者自身に思考を展開させ、そして、その考えを日本語で表現することを求めるものである。したがって、「考える問題」には白黒はっきりした“たった一つの正解”と呼べるような回答はなく、いわゆる「模範回答例」のようなものも提示しない。学習者はどのように答えてもよく、自由に自分

の考えを述べればよいわけである。ただし、学習者が、「考える問題」の問題文の意味するところ（出題の意図）に関して誤解するのを回避するため、問題文には英訳を付した。回答は記入ボックスに書き込めるようになっており、送信ボタンを押せば、管理者である筆者ら教材作成者に送信される。そして、後日、教材作成者からコメント等、フィードバックが返信される仕組みになっている。

【図8】 考える問題



この「考える問題」の記述式回答とフィードバックシステムは、森川（2009）の実践で得た知見に基づいて考案されたものである。非漢字文化圏学習者の特徴として、確かに漢字（漢語）に関するハンディキャップが上級読解における大きな障害であることは否めないが、逆に、自分の意見や考えを持ち、それをアウトプットしていくことにおいては自信とやる気のある学習者も多い。その点を文章読解練習の動機付けに結びつけるため、「考える問題」を設定した。

もし、学習者からの多様な回答と、それに対する学習者同士の、または教師も交えてのフィードバックを教室活動として展開すれば、ディスカッション・スタイルでの話す・聞く練習にもなる。さらには、ディスカッション（読書会）などの議論を通して、学習活動への参加者全体が、一人ではなかなか経験できない深い読みの体験を得られるという効果も期待できる<sup>18</sup>。

このように問題練習のセクションを学習プロセスの中に置くことで、読解練習を単に読むだけの練習ではなく、学習者の話す、聞く、書く技能をバランスよく養成する方向に発展させることがで

<sup>18</sup> 森川(2009)では、実際に文学作品をテキストとした一連の教室活動のまとめとして、日本人ゲストを招いての読書会を実践したことが報告された。

きるのである。

#### 4. 2. 5 索引

索引は語彙リストと文型リストをPDFファイルで公開している。

ツールチップ語注表示機能で語注が出る本文HTMLファイルでは、語注が必要な語句に対して基本的に初出の箇所では語注は表示されない<sup>19</sup>。これを補う意図から、語彙リストを「出現順」「あいいうえお順」「品詞別」の3種類で用意した。なお、ツールチップ語注表示では、プレ2級レベルを想定して2級以上の語句に注をつけているが、語彙リストではそれよりも多めに語句をあげている。

文型に関しては、このtutor.bunkoでは表現・文型についての詳しい指導はせず、文章読解にあたってポイントとなる表現・文法に関してのみ、「選ぶ問題」で確認することにとどめている。これに加えて、学習者が自力で文型辞典等にアクセスする際の手助けとなるように、「文型リスト」を公開している。

#### 4. 2. 6 あとがき

各作品には、読後のフォロー用に「あとがき」をつけた。

「あとがき」では、作品の文化的な価値を確認したり、作品中の謎の解き明かしをしたり、あるいは視点を変えた読み方の提案などもしている。

なお、「あとがき」にも作品の紹介と同じく、英語の全文訳をつけている。

#### 4. 2. 7 ブログ

tutor.bunkoを外部ブログ「tutor.bunko みんなの声」とリンクさせ、学習者からの「考える問題」の回答や感想、それに対する学習支援者（＝教材作成者）からのコメントなどを公開し、学習者・支援者間のやりとりを他の学習者のもとより、広くみんなで共有していく機能をつけた。

また、それだけでなく、実際の授業での教室活動案や、授業や生活の中からピックアップした内容を記事にしていくことで、初中級用の短く簡潔な読み物の素材を蓄えたり、日本語教師間で素材や情報を共有していくことになるなど、ブログの活用によっても教材コンテンツ拡充への可能性のひろがることが期待できる。

---

<sup>19</sup> 同一語句でも違う意味・用法で使用されていれば、初出以降でも語注を付した。

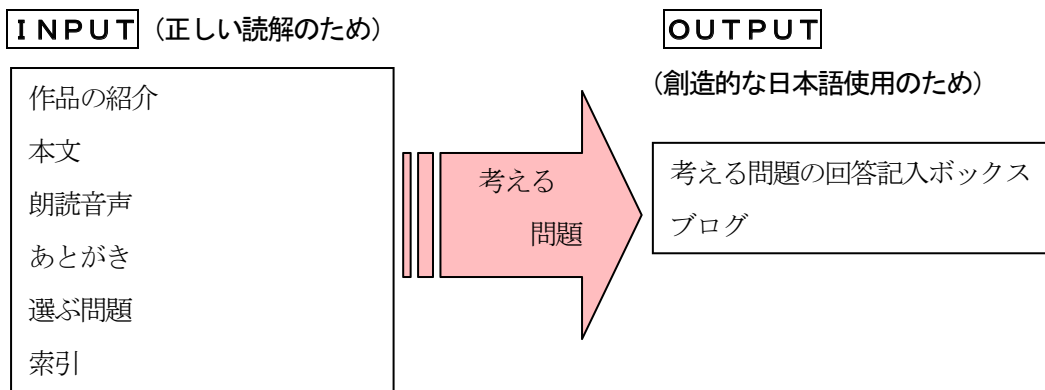
【図9】 付属外部ブログ「tutor.bunko みんなの声」



#### 4. 2. 8 コンテンツ構成のまとめ

以上、紹介してきた「小品集」のコンテンツ構成を、ここでまとめておこう。

【図10】 一作品内のコンテンツ構成



【図10】に見られるように、「小品集」のコンテンツは、学習が単なる読解、単なるインプットでとどまることなく、深く内容について考える過程を経て、述べる・語る・表現するというアウトプットへ発展するように組まれている。そして、アウトプットのベースに、内容について深く考えるプロセスをおくことに、筆者らは重要性を認めている。それゆえに「考える問題」が「小品集」の“かなめ”なのである。



## 5. e-chuta システムと日本語教材作成者の役割

前述した本文HTMLファイルの作成にあたっては、tutor.bunkoと同一サーバー内に置かれた教材作成支援システムe-chuta（イーチュータ）<sup>20</sup>が機能している。以下、北村（2009）に従って、e-chutaシステムによる本文HTMLファイル作成までの手順を示す。

**【表7】 e-chuta システムを利用した本文HTML ファイル作成過程**

- 
- (1) 教材作成者が本文を選び、e-chuta システムに本文データを送る。
  - (2) e-chuta が形態素解析システムによって本文を形態素に分割してエクセル表化し、教材作成者に返す。【図 11-α】
  - (3) 教材作成者は、ふりがな、単語・連語の語義注釈、会話文の話し手など、HTML ファイルで適切に表示されるべき要素をエクセル表上で編集する。【図 11-β】
  - (4) 教材作成者が編集したエクセル表を e-chuta システムに返す。
  - (5) e-chuta が自動処理で本文 HTML ファイルを作成する。
- 

【図 11-β】のように、エクセル表では、A列がHTMLファイルに反映されるテキスト<sup>21</sup>、B列が形態素の辞書形、C列がふりがな、D列が語注となっている。この編集は教材作成者の手作業によらなければならないが、その後は自動処理でふりがなとツールチップ表示機能のついたHTMLファイルができあがる。

エクセル表編集作業の過程では教材作成にあたる教師の実践経験から得た知見が生かされ、学習者にとっては従来のツールチップ辞書よりも使い勝手のいいように語注をつけていくことができる。学習者がどんな場合に何を苦手としどんな助けを必要とするか、また、教育的見地からどのタイミングでどの程度の助けを与えるか（たとえば、ある語に対するふりがなや語注を初出時以降、どの程度“親切に”与え続けるか、など）、機械的には割り切れない部分のさじ加減がHTMLファイルの裏でなされているわけである。

オンライン学習サイト教材の作成過程で「手作業」が入るステップは、たまたまテクノロジーの限界点とも一致するところであるが、人間の言葉は究極的には人間が育てるものであるということを前提にすれば、人間＝教材作成者の作業ステップがあることは当然のこととして了解できるであろう。

さらに、このエクセル表に書き込める情報は、たとえば画像ファイルへのリンクやWikipediaなど他サイトへのリンクなど、多方面に拡張できるので、将来的には学習者に幅広い知識の提供が可

---

<sup>20</sup> e-chuta は URL:<http://basil.is.konan-u.ac.jp/e-chuta/> で公開予定。

<sup>21</sup> A列を上から下へ読んでいけば、作品の本文になる。

能になるであろう。

【図 11-α】 テキストの形態素解析エクセル表 【図 11-β】 教材作成者による編集済みエクセル表

Figure 11-α shows a morphological analysis table with columns A through D. The text in the cells is as follows:

1216	表	表	ヒョウ	list
1217	の	の	ノ	
1218	竈	竈	ヘツツイ	household ancestry
1219	で	で	デ	
1220	火	火	ヒ	uesday; fawar
1221	を	を	ヲ	
1222	焚い	焚く	タイ	
1223	く	く	ク	
1224	い	いる	イ	sit stay
1225	ます	ます	マス	measure
1226				
1227	大きな	大きな	オオキナ	vast great
1228	鍋	鍋	ナベ	casserole saucepan
1229	の	の	ノ	
1230	中	中	ナカ	within betweene
1231	で	で	デ	
1232	は	は	ハ	
1233				
1234	何	何	ナニ	noway something
1235	か	か	カ	
1236	くずくず	くずくず	グズグズ	loose
1237	煮え	煮える	ニエ	
1238	て	て	テ	
1239	い	いる	イ	sit stay
1240	まし	ます	マシ	measure
1241	た	た	タ	
1242				
1243	「	「	「	
1244	ああ	ああ	アア	
1245				
1246	葬式	葬式	ソウシキ	funeral
1247	た	た	タ	
1248	」	」	」	
1249	と	と	ト	
1250				
1251	ご	ご	ゴ	
1252	ん	ん	ン	or ipes
1253	は	は	ハ	
1254	思い	思う	オモイ	think care for
1255	まし	ます	マシ	measure
1256	た	た	タ	
1257				

Figure 11-β shows the same data after manual editing. The text in the cells is as follows:

1135	表	表		
1136	の	の		
1137	竈	竈	かまど	kitchen range; cook
1138	で	で		
1139	火を焚い	火を焚く	ひをたい	to make a fire
1140	く	く		
1141	い	いる		
1142	ます	ます		
1143				
1144	大きな	大きな		
1145	鍋	鍋	なべ	saucepan
1146	の	の		
1147	中	中		
1148	で	で		
1149	は	は		
1150				
1151	何か	何か		
1152	グググ	グググ		
1153	煮え	煮える		
1154	て	て		
1155	い	いる		
1156	まし	ます		
1157	た	た		
1158				
1159				
1160	「	「		
1161	ああ	ああ	ごん	
1162				
1163	葬式	葬式	そうしき	funeral
1164	た	た		
1165	」	」		
1166	と	と		
1167				
1168	ごん	ごん		
1169	は	は		

Annotations in the figure include:

- Speech bubble: "連語を一単位として一セルに" (Compound words as one unit in one cell) - points to row 1222 in Figure 11-α and row 1139 in Figure 11-β.
- Speech bubble: "教材作成者による振り仮名&語義注釈" (Manual annotations by the author) - points to the new column C in Figure 11-β.
- Speech bubble: "一単語を一セルに" (One word in one cell) - points to row 1252 in Figure 11-α and row 1168 in Figure 11-β.
- Speech bubble: "会話文の話し手を表示" (Display the speaker in conversational text) - points to the word "ごん" in row 1161 of Figure 11-β.

## 6. おわりに・・・内容中心の教育への方向性と自律学習支援サイト

本稿第4章でも述べたが、tutor.bunkoは“学習者と支援者（＝教材作成者）の双方向のインタラクション機能を備えた”オンライン日本語学習支援サイトであることを特色としている。双方向のやりとりの中で何を伝えるか……、そこで筆者らが教育的見地から最も重きを置いているのは「考える問題」の果たす教育効果である。目指すところは単なる読解力養成ではなく、行間を読み取って考え抜く力、自分の考えを展開していく力、そして、自分の考えた内容を目標言語である日本語で表現する力の養成なのである。この学習活動のプロセスに付随する形で、日本語を読む、聞

く、書くことの練習もできる。

牧野 (2009) では、アニメーション映画作品「千と千尋の神隠し」を教材とし、学習者に日本語と日本文化について発見させる「内容質問」で学習者のプロフィシエンシーを育てていく授業実践 Content-based Instruction(内容中心の語学教育)についての報告がなされた。

筆者らも、本当の意味での上級レベルの能力、つまり知的レベルの高い成人の語学力を備えた学習者を育てるには、このような「内容中心の語学教育」の実践が欠かせないことを実感しており、tutor.bunko でも内容中心の語学教育の方向性を貫いているつもりである。

しかし、内容中心の語学教育にも弱点があり、学習者要因<sup>22</sup>によって教室活動として「内容中心の語学教育」のスタイルがベストであるとも言いきれないところがある。その点、学習者自身の責任において選択されることが前提の自律学習支援サイトなら、学習者要因の問題点はあらかじめクリアされている。そのように考えると、将来、「内容中心の語学教育」の一つの有効なスタイルとして自律学習支援サイトが積極的に活用される可能性が見えてくるのではないだろうか。

今後の課題には、e-chuta システムの活用による教材作成、コンテンツの拡充と整備、コンテンツや機能の改善のためのモニタリング・テスト、多言語対応に向けての準備、そして、携帯端末機からのアクセスに対応するための機能の充実などがある。これら、課題となっている数々の作業プロセスの中で、筆者らは日本語教材コンテンツ作成担当者として教材自体の質的な水準の向上を常に心がけていきたいと思う。

この日本語読解学習支援サイトを活用することで学習者に本物の日本語運用能力プロフィシエンシーを育ててもらうために、技術と人間力を結集して tutor.bunko の機能とコンテンツの拡充を進めていきたい。

## 謝辞 1

本研究は甲南大学総合研究所、平成 21 年度 J S T シーズ発掘試験 11-143、平成 21 年度科研費（基盤 B）21320095 の支援により行われました。

## 謝辞 2

tutor.bunko プロジェクトは、快く主旨に賛同してプロジェクトにご参加いただきました協力者の方々によって、ここまで順調に作業を進めることができました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

---

<sup>22</sup> 森川(2009)でも実例が報告されたが、学習者側の要因（たとえば性格や心理的要因など）によって、一部の学習者が内容中心の語学教育のスタイルに抵抗感を示すことがあり、教室運営上の障害となりうる。また、学習者は案外オーソドックスな従来の教科書を使用した教室学習を好むということも現場では知られている。

## tutor. bunko 作成スタッフ&協力者

教材作成：森川結花、永須実香

朗読：荒井礼子、市村徹、加藤正文、北川京子、長野一字

挿絵：築地葵

英訳：長野ゆう

英語注チェック：三木真奈美

システム開発：荊木亜里沙、北村達也

ホームページ作成：北村達也、春名宣明

## 参考文献

藤永保(2001)『ことばはどこで育つか』大修館書店

北村達也(2009)「リーディングチュウ太の最新情報」甲南大学リーディングチュウ太シンポジウム  
2009 (口頭発表)

国際交流基金日本語教育支援部 企画調整チーム (2008)『海外の日本語教育の現状 =日本語教育  
育機関調査・2006年=改訂版』国際交流基金)

国際交流基金(2009)『J F日本語教育スタンダード試行版』国際交流基金

牧野成一 (2008)「O P I, 米国スタンダード、CEFRとプロフィシエンシー」

牧野成一 (2009)「日本語・日本文化教育とアニメ——国際的な視野の中で——」立命館大学大学院  
言語教育情報研究科 平成21年度第1回学術講演会 (口頭発表)

文部科学省(2005)「読解力向上に関する指導資料——P I S A調査(読解力)の結果分析と改善の  
方向——」

森川結花 (2009)「文学作品をテキストとした上級学習者用読解教材の開発と実践」甲南大学リー  
ディング・チュウ太2009 ワークショップ (口頭発表)

永須実香 (2009)「日本語・欧米系初級学習者向け読解教材の方向性」リーディングチュウ太2009  
シンポジウム (口頭発表)

野口勝三(2009)「大学における日本語リテラシー教育——対話関係を中核とした「考える」の実践——」  
『日本語学』Vol. 28 No. 2

高橋和子(2009)「文学と言語教育——英語教育の事例を中心に——」『シリーズ朝倉<言語の可能性  
>10言語と文学』朝倉書店

高梨 芳郎(2009)「<データで読む>英語教育の常識Q&A」研究社

館岡洋子(2005)『ひとりで読むことからピア・リーディングへ日本語学習者の読解過程と対話的協  
働作業学習』東海大学出版

The concept and development of “tutor. bunko”  
— a Japanese reading practice website for integrated skill development—

MORIKAWA Yuka, NAGASU Mika, HARUNA Noriaki, KITAMURA Tatsuya

**Abstract**

“tutor.bunko”, (URL:<http://basil.is.konan-u.ac.jp/tutor/bunko/>, went public on web in September 2009), is an on-line study support site for Japanese reading comprehension, designed especially for those from non-*kanji* (Chinese characters) cultures. The site is equipped with the system to reduce burdens for non-*kanji* culture learners to read Japanese writing by using information technology (IT).

A learner reads the provided reading materials, listens to the sound, write in what he/she thinks, and performs verbal communications with teachers and others through internet. This study process is not mere “Japanese reading comprehension practice”, but is aimed at “Content-based Instruction” in order to help learners acquire intelligently high proficiencies. The learner also deepens his/her understanding of Japanese language and culture through this study process.

Also, “tutor.bunko” is a site for teachers as well as for learners, as it is equipped with the support system to create study materials and share them with others. “tutor.bunko” contributes to assist both learners and teachers to reduce their burdens by taking advantage of information technology, and, at the same time, cultivates the learners’ comprehensive Japanese language proficiencies through actual verbal interaction between people.

**Keywords** : reading comprehension practice, Content-based Instruction, proficiency, internet, on-line study support site

(Morikawa, Haruna, Kitamura; Konan University, Nagasu ; Sophia University)